

自然保護の名の下に

アメリカのアリゾナ州にカイバブ高原という草原地がある。古くからシカの狩猟地として利用されてきたのだが、20世紀初めにシカの保護を目的として、この地区でのシカ狩りの禁止とコヨーテ・オオカミなどの肉食動物の捕獲が行なわれた。

さて、この後どうなったか？

当初 3000 頭いたと推測されるシカの数は、天敵の肉食動物が減ったために 20 年後には 100000 頭にまで増えることになる。草や低木の葉などシカが届く範囲はすべて食い尽くされ、しかも蹄により踏み固められた土地からは新たな草が生えにくくなってしまったのである。本来この高原の草の生産量は自然状態でせいぜいシカ 30000 頭分しかなく、当然多くのシカが餓死することとなり、1939 年には 10000 頭にまで減少したという。保護するつもりがより悲惨な状況を作り出してしまったのである。さらに同じ草食動物のウシやヒツジも草不足により 25000 頭から 4000 頭にまで減少する被害まで出てしまった。

中 3 の理科で習うことであるが、食物連鎖による自然界のつながりは愚かな人間の都合のいいように安定するものではないことを教えてくれるのである。

ギフチョウなども場所によっては条例で捕獲禁止になっているところも少なくない。もちろん乱獲により絶滅した動物は数多くいるが、本当に保護するつもりならばその生物が育つための環境（餌となる動植物や水や気候）を豊かにしなければならないのである。目に見えるものを「採るな」というのが最も安易で危険な規制であることはカイバブのシカが警告してくれるのである。

食物連鎖の頂点に立つわれわれ人間も自然のバランスの中で生かされているのである。むやみな殺生は控えるべきであるが、すべての人は他の生物の命を奪って生きている。肉食主義者といえども、それは免れない。その自責の念からか、単なる個人的な哀れみの感情からなのか、動物愛護・自然保護を狂信的に唱える人々がいる。これは無知と独善的な正義感によるものであるからやっかいである。

今、国際捕鯨委員会では商業捕鯨のみならず調査捕鯨も全面禁止になろうとしている。日本が行なってきた調査捕鯨の結果、クジラの数が増加していることやそれが引き起こす他の魚への影響をどれほど科学的に説明しようが欧米諸国は聞く耳を持ってくれないという。

捕鯨については古事記や万葉集にもその記述があり、日本人は単に食料源としてのみならず「捨てる場所はない」と言われるほど様々な製品に大切に利用してきた長い歴史がある。幕末のころに船舶用の鯨油だけ取って肉は捨てていたアメリカ人に非難されるのは心外である。